

博 多 1 7 3

—博多遺跡群 第222次調査報告—

2 0 2 1

福岡市教育委員会

博多173

—博多遺跡群 第222次調査報告—



2021

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市・福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行なって、往時のあり様を後世に伝えています。

本書は、平成30年度に行ないました、博多遺跡群第222次調査の成果について報告するものです。この調査では古墳時代から中世前半にかけての多くの遺構を確認することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対するご理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

また、最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担等多くのご協力をいただきました、株式会社ジャリアをはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

— 例 言 —

- ・本書は、福岡市が平成30年度に調査を行なった、博多遺跡群第222次調査（博多区紙園町）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・調査地点及び期間は以下の通りである。
第222次調査（博多区紙園町149番4他）：平成30年10月15日～平成31年1月18日
- ・本書における輸入陶磁器の分類については下記の文献を参考にした。
太宰府市教育委員会編1983「太宰府系跡」X V 太宰府市の文化財 第49集
- ・本書の執筆、実測、製図は藏富士が行なった。遺物実測の一部は中原三栄子による。
- ・本書における方位は座標北であり、遺構にはSK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、SC（堅穴住居）等の略号を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目 次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の記録	4
1.	調査の方法	4
2.	層序	4
3.	遺構・遺物	6
IV	まとめ	20

挿 図 目 次

図1 博多遺跡群 (1/25,000).....	2	図11 SK047・060・075・076 (1/80, 1/60, 1/3).....	11
図2 周辺の調査 (1/1,000).....	3	図12 SK084・102 (1/40, 1/20, 1/3).....	12
図3 調査区位置 (1/400).....	3	図13 SK024・207・243・270・292・293 (1/60, 1/3).....	14
図4 土層 (1/320, 1/80).....	4	図14 SE001・070・174 (1/80, 1/3).....	15
図5 遺構配置 (1/160).....	5	図15 SK220・435 (1/20, 1/6, 1/3).....	16
図6 SK002・SD050 (1/100).....	6	図16 SK467 (1/60, 1/4, 1/3).....	17
図7 SK002・SD050出土遺物 (1/3).....	7	図17 SC260・425・426 (1/80, 1/4).....	18
図8 SK005・053・056 (1/60, 1/40).....	8	図18 その他の遺物 (1/6, 1/3, 1/2).....	19
図9 SK005出土遺物 (1/3).....	9		
図10 SK053・056出土遺物 (1/4, 1/3).....	10		

図 版 目 次

図版1 ①I区 第1・2面全景 (南西から)	②I区 第2・3面全景 (南西から)
③I区 第2・3面全景 (南から)	
図版2 ①II区 第1面全景 (南東から)	②II区 第2面全景 (南東から)
③II区 第3面全景 (南東から)	
図版3 ①SK002 (南から)	②SK002・467土層 (北西から)
③SK005遺物出土状況 (南東から)	④SK005土層 (南から)
⑤SD050 (東から)	⑥SK075・076 (北西から)
⑦SK084遺物出土状況 (南東から)	⑧SK102遺物出土状況 (南東から)
図版4 ①SK024土層 (南東から)	②SK053土層 (東から)
③SK056土層 (南西から)	④SE070 (南東から)
⑤SK292土層 (北西から)	⑥SK293土層 (北西から)
⑦SK220土器埋設状況 (南東から)	⑧耳環出土状況 (南西から)
図版5 出土遺物	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成29（2017）年9月20日、株式会社ジャリアより博多区祇園町149番4他における土木工事に対して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた（事前審査番号29-2-551）。この地点は周知の埋蔵文化財包蔵地（博多遺跡群）内であることから、埋蔵文化財課では確認調査を行ない、現地表下180cmで遺構の存在を確認した。これを受け両者協議の末、工事による遺跡への影響は避けられないという結論に至り、遺跡の記録保存（発掘調査）が行なわれることとなった。発掘調査の開始は平成30（2018）年10月15日。平成31年（2019年）1月18日にすべての作業を終了した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託 株式会社ジャリア

調査主体 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課 課長 大庭康時 調査第2係長 大塚紀宜

調査庶務 文化財活用部文化財活用課 松原加奈枝

調査担当 埋蔵文化財課 調査第2係 藏富士 寛

博多222次

遺跡調査番号	1821		遺跡略号	HKT222	
地番	博多区祇園町149番4他		分布地図番号	48 千代博多	
開発面積	489.29m ²	調査対象面積	226m ²	調査面積	226m ²
調査期間	平成30年10月15日～平成31年1月18日				

II 位置と環境

博多遺跡群は、御笠川と那珂川にはさまれた博多湾岸の砂丘上に立地し、古代末から中世を中心として弥生時代から近世に至る存続期間を有する複合遺跡である(図1)。博多遺跡群の立地する砂丘は、東西方向にのびる3つの砂丘列によって形成されており、通常内陸側の2列を「博多浜」、外側の1列を「息浜(おきのはま)」と呼ぶが、第222次調査地点は「博多浜」の中央部付近にあたり、周辺では数多くの調査が行なわれている(図2・3)。

第222次調査の東側に位置する第175次調査は、調査面積941m²の大規模なもので、計4面の調査が行なわれ、古墳時代前期から中世後半の遺構や遺物が確認されている(田中編2009)。古代末から中世初頭、特に12世紀半ばから後半の遺構が主体を占めており、13世紀前半代以降のものが少ないと特徴として挙げられている。古墳時代前期の遺構は多く、堅穴住居等が調査区全体にわたって確認されている。当該期の堅穴住居は、第133次調査(杉山編2003)、第170次調査(小林編2009)などでも発見されており、その広がりが注目される。特に目を引く遺構があるわけではないが、古代の遺構は調査区中央部に集中する。第175次調査の周辺では、官衙城を示すと考えられる区画溝が確認されており(池崎・本田編2010:301頁)、当期における遺構の動向は看過すべきものではない。

大通り(国体道路)を挟んだ北西側では、第79・172次調査が行なわれている。第79次調査は、調査面積610m²の調査で、5~6面の調査が実施されており、古代(8世紀)と中世(11世紀後半~14世紀前半)を中心とする遺構・遺物が確認されている。土師器と陶磁器の一括廃棄土坑が確認されており、土師器の一括廃棄を日本的な豪宴のあり方と捉え、輸入陶磁一括廃棄土坑(12世紀)→土師器一括廃棄土坑(13世紀)という変化の背景に、当地の宗人居住区からの脱却をみる(大庭編1996)。

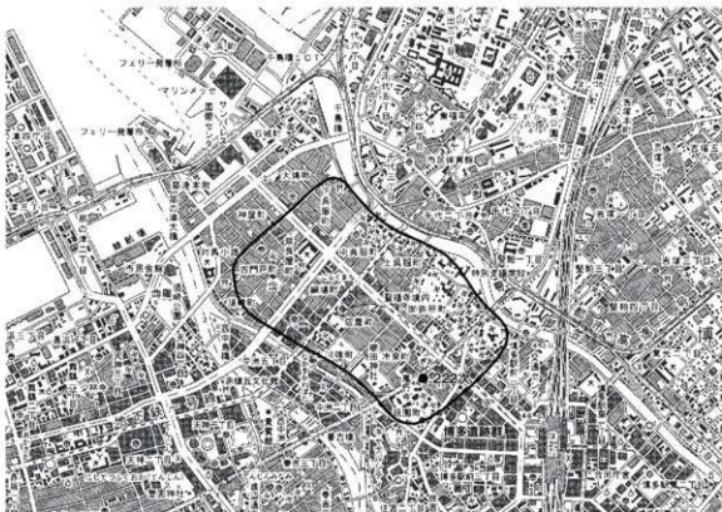


図1 博多遺跡群 (1/25,000)

第172次調査は、面積2,540m²にも及ぶ大規模調査で、計4面の調査が行われており、弥生時代前期から中世後半（15・16世紀）の遺構・遺物が確認されている（池崎・本田編2010）。特に注目されるのは、古代の帯飾金具（遼方）やガラス製作関連遺物の出土であり、前者は第79次調査でも出土し、先に触れた官衙の存在を窺わせる資料であり、後者は第180次調査（加藤編2009）においても確認でき、ある程度の規模を有した工房群が周辺に存在したことを示唆する。

文献

池崎謙二・本田浩二郎編2010「博多135」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1086集 福岡市教育委員会

加藤良彦編2009「博多133」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集 福岡市教育委員会

小林義彦編2009「博多128」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1040集 福岡市教育委員会

杉山富雄編2003「博多93」福岡市埋蔵文化財調査報告書第764集 福岡市教育委員会

田中壽夫編2009「博多134」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1065集 福岡市教育委員会

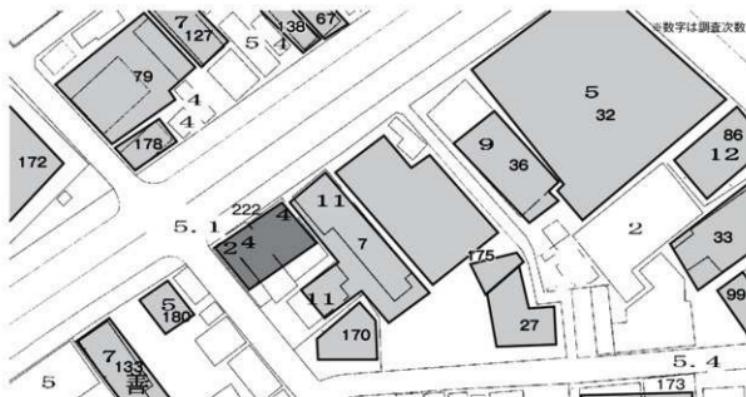


図2 周辺の調査 (1/1,000)



図3 調査区位置 (1/400)

III 調査の記録

1. 調査の方法

最初にGL-180cmまでの表土すき取りを行ない、標高4m前後の暗褐～黒褐色砂質土上より調査を開始した。排土処理の都合上、調査区を2つに分け、調査区北東側の2/3をI区、南西側1/3をII区とし、I区の調査終了後に重機を使用した土砂反転を行ない、II区の調査を行なっている。遺構の掘り下げは人力によるもので、1回0.2m程の掘り下げ毎に、遺構の確認と記録の作成をしており、標高3.2m前後の黄褐色砂層（砂丘面）にいたるまで、計4回程度の面的な調査（①～④面）を実施した。

2. 層序

図4は土砂搬出用のベルトコンベア設置台を兼ね、I区の中央に設けた土層観察用ベルトの土層図であるが、これをみれば当調査区は、無数の掘り込みや整地が行なわれていることが分かる。平面的に認識困難な遺構も多く、先に述べた記録作成を行なった①～④面は、作業上設定した調査面であり、当時の生活面ではない。ただ計4面の調査の内、①・②面までは中世前半の遺物を中心とする遺構や遺物で占められていたのに対し、③面調査時には一部に奈良時代を中心とする古代の遺構や遺物が認められるようになり、④面では、古墳時代前期の資料がまとまって確認できた。図4をみれば、③面辺りから比較的均一な暗茶褐色砂質土が出現し、④面には暗黄～黄褐色砂質土が主となっており、このような土層の変化はこのような遺構・遺物相との違いとも対応するのだろう。

以上の所見から、ここでは便宜的に、標高3.6～4.0m辺りで確認した①・②面の遺構をまとめて第1面の遺構、標高3.4～3.6m辺りで確認した③面の遺構を第2面の遺構、砂丘面近くの標高3.2～3.4m辺りで確認した④面の遺構を第3面の遺構と表記することにする。そして、第1面（調査①・②面）の遺構配置図を図5上に、第2・3面（調査③・④面）を合成した図を図5下に掲載する。図5上は中世までの遺構、図5下は、それに古代や古墳時代の遺構が加わったものを示している。

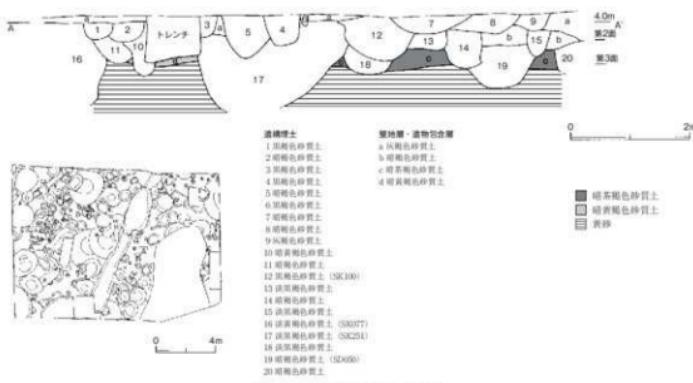


図4 土層 (1/320, 1/80)

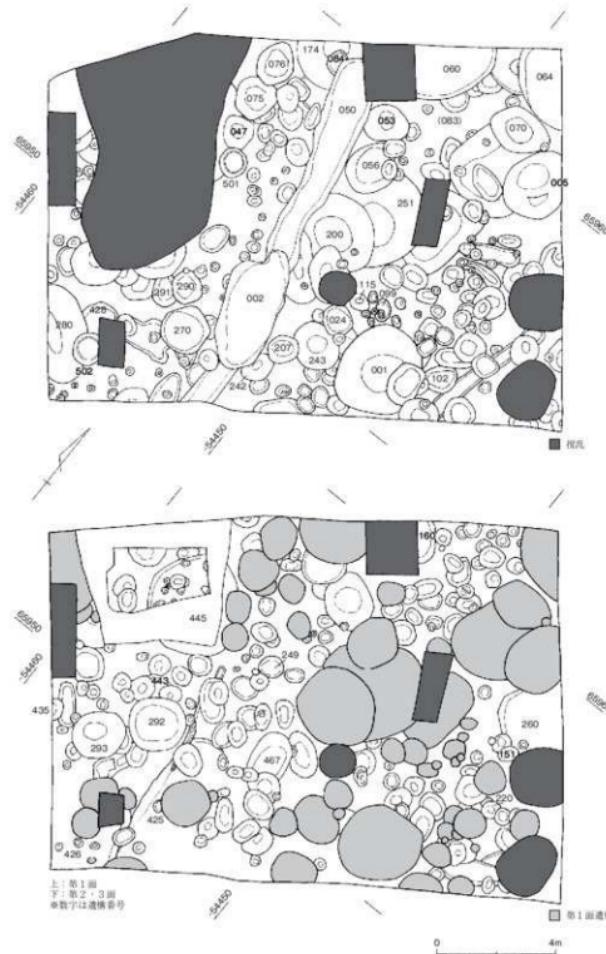


図5 造構配置 (1/160)

3. 遺構・遺物

第222次調査では、土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、竪穴住居（SC）、小穴といった多くの遺構を確認することができた。これらは、中世前半を中心とし、その他、奈良時代や古墳時代等に位置づけることができる。以下では、各遺構について、その所見と出土遺物について述べる。

（1）第1面の遺構・遺物

①土坑（SK）・溝（SD）

SK002・SD050（図6）

SD050は調査区の中央に存在し、南北方向へ直線的に延びている。幅は0.8~1.5mで、北側へ向けて幅広となる。断面は台形を呈し、底面の高さは3.5~3.7mで、南北いずれ側にも大きな傾斜は認められない。

調査区やや南寄りのSD050上には、SK002が切り込む。SK002は平面椭円形を呈し、壁体の立ち上がりは急角度である。両者の配置をみてSD050に関連する遺構であることは明らかであり、土坑状を呈するものではあるが、本来は溝の溜部であった可能性は否定できない。SK002内には、多量の炭化物が混じる黒褐色砂層が堆積しており、そこには土師器壊・皿を主体とする大量の遺物が含まれていた。土師器は完形品・大形片よりも接合も困難な細片が多く、単なる廃棄土坑ではないことが窺える。これに類する炭混じりの黒褐色砂層はSD050においても確認でき、多量ではないがここにも土師器壊・皿が含まれている。これも両遺構が関連することの証左といえるだろう。

出土遺物（図7）

SK002からは、主体となる土師器壊（1~6）・皿（7~12）の他、白磁（13）、青磁（14）等が出土している。土師壊は大型品（6）も存在するが、口径13cm前後の個体が中心をなす。13は白磁皿で、VI-1a類。底面には「張○」の墨書がある。14は同安窯系青磁碗。SD050からは、白磁（1・3・4）、青磁（2）、土師器壊（5・6）、皿等が出土している。1は白磁皿でIII-1類、3・4は碗で、3はV類に相当する。2はI類の竈窯系青磁碗である。

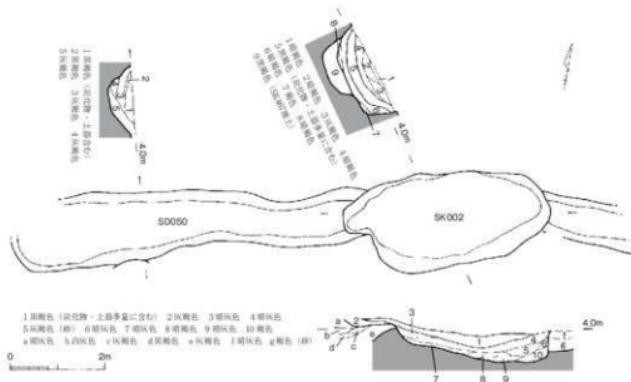


図6 SK002・SD050 (1/100)

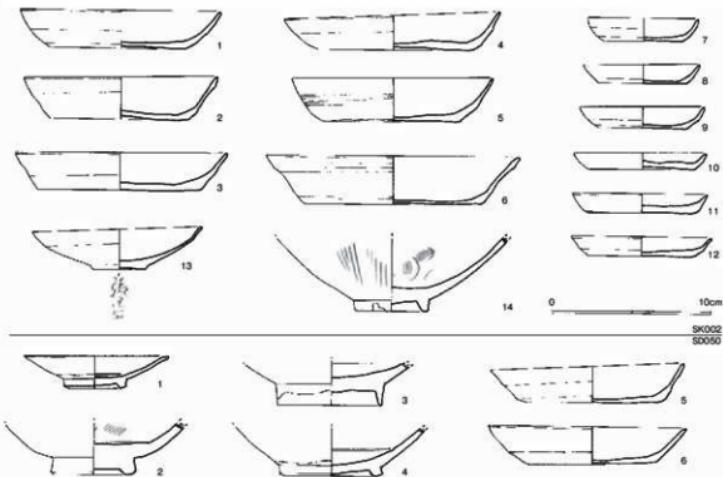


図7 SK002・SD050出土遺物(1/3)

SK005(図8)

調査区北東端にあり、平面は径2~2.5m程のいびつな円形を呈している。後述する土師器壺・皿の出土状況から、本来は(隅丸)方形であった可能性を考えておきたい。壁面は垂直に近い立ち上がりを示しており、底面は平坦で、南北側が段をなしている。深さは1.7m。内部からは土師器碗・皿を中心とする大量の土器が出土した。SK002とは異なり、完形品もしくは復元図化の可能な個体が多い。土器は7層と16・21層を中心として出土しており、上下に大きく二分することができる。前者を上層、後者を下層出土とする。いずれも土師器壺・皿を主体とし、壺は口径13cm前後である等、両者に大きな違いはない。下層の土器は土坑北西側の壁近くに偏在するという特徴がある。

出土遺物(図9)

土師器壺(1~24・33~41)・皿(25~32・42~41)が主で、若干の白磁や青磁(48)、陶器、瓦器等が出土している。1~32は上層、33~48は下層の出土。48は竜泉窯系青磁碗であり、外面に片彫による蓮弁文を施す。II類に相当する。

SK047(図11)

調査区中央北寄りに位置する。①面において存在を確認したが、正確な形の見極めが難しく、全形を把握したのは、②面調査時からである。北側に近接してSK075が存在しており、本来は切り合い関係にあった可能性が高いが、先後関係を確認するには至っていない。平面が径1m程のいびつな円形を呈し、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっている。底面は鉢鉢状をなしており、深さは0.8m程度を測る。

出土遺物(図11~11)

白磁(11)、青磁、土師器、陶器等が出土している。量は比較的小ない。11は白磁碗で、VII-1類に相当する。

SK053 (図8)

調査区中央やや北寄りに位置する。SK056の北隣に存在するが、両者の切り合いは確認できなかつた。平面は径1.3~1.5m程のいびつな円形を呈しているが、南側は円弧というよりはやや直線的で、「コ」字形を呈していることから、本来は平面長方形の土坑であった可能性を考えておきたい。壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっており、底面は平坦である。北側掘方の肩部はくずれ、緩やかな傾斜となっている。深さは0.7m。

出土遺物 (図10-1~3)

白磁(1)、瓦器(2)、土師器壺・皿、甕(3)等が出土している。量は少ない。1はIV類の白磁碗。2は瓦器碗で、口径16.2cmを測る。3は土師器甕。混入品か。

SK056 (図8)

SK053の南側に隣接して存在する。壁面は垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。壁際近くには、汚れた黄褐色砂質土が内側へせり出しながら堆積しており、このことは黄褐色砂質土とその他の埋土との境に木壁等が存在していた可能性を示唆する。現在平面橢円形を呈しているが、それを考慮すれば、本来は長方形であったのかも知れない。深さは1.0m。

出土遺物 (図10-4~12)

4~7は白磁である。4・5・7は碗で、4はV-4類、5はIV類、7はVI類に相当する。4・7の高台内には墨書があり、7は「陳○」と読める。6はV-1類の皿で、内面に白胎線を有する。8・9は越州窯系青磁の壺。10~12は土師器皿であり、12は台部を有する。10・11の口径はそれぞれ8.6cm・9.6cm、12は口径10.6cm、高台径7.2cmを測る。

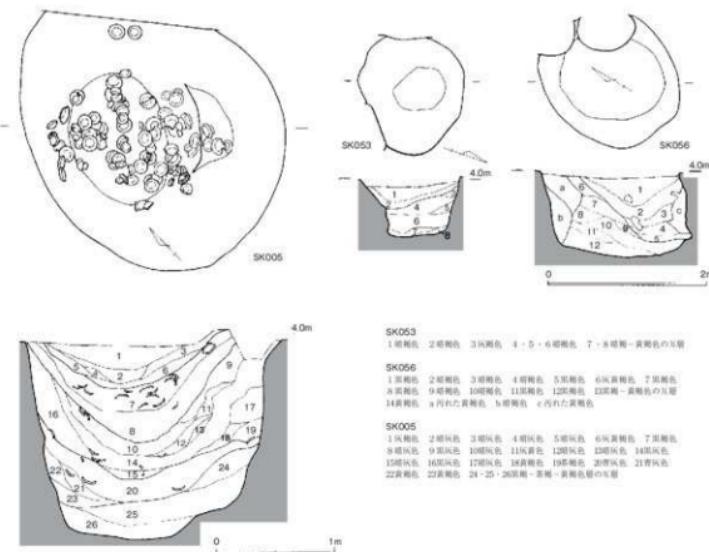


図8 SK005・053・056 (1/60, 1/40)

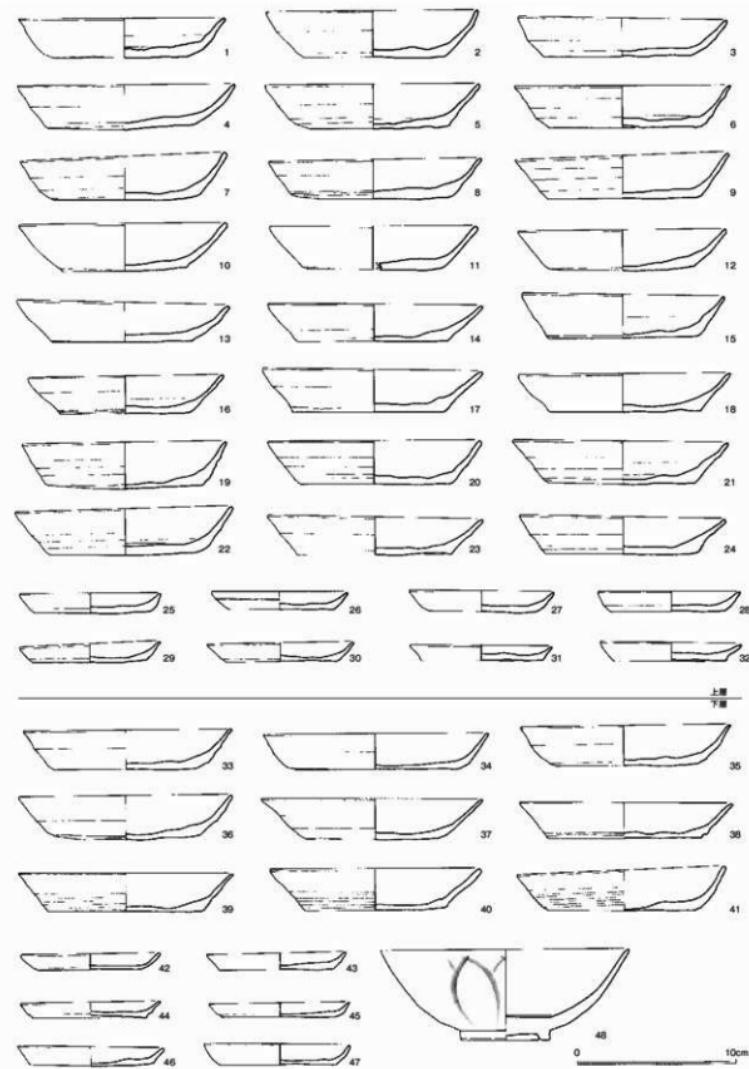


図9 SK005出土遺物 (1/3)

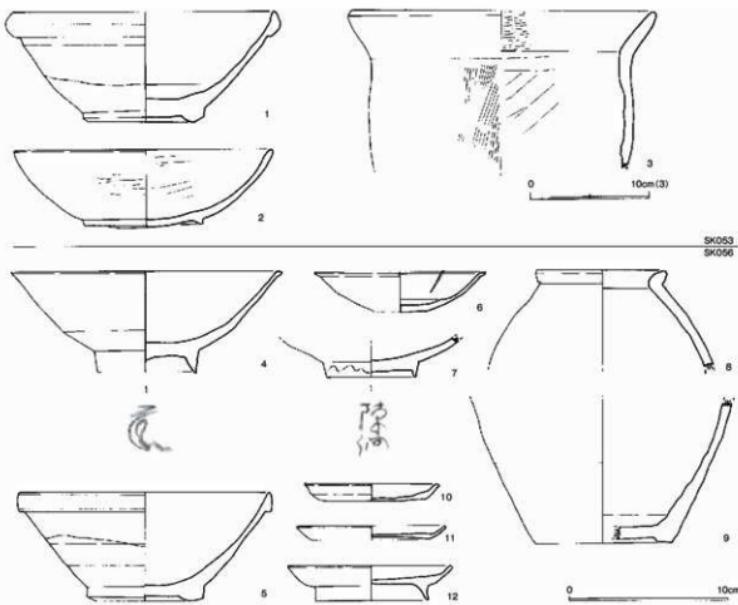


図10 SK053・056出土遺物 (1/4, 1/3)

SK075 (図11)

調査区中央北寄りに位置する。SK047の北隣に位置し、北側の一部はSK076に切られている。平面が径1.3m程のいびつな円形を呈し、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっている。底面はやや擂鉢上をなしており、深さは0.9m程を測る。このSK075とSK047、そして後述するSK076は近接して南北方向に並んで存在し、本来は互いに切り合い関係にあったものと考えて良い。規模や形状とも類似しており、密接な関連を持って営まれた、一連の土坑として解釈が可能である。

出土遺物 (図11-12~16)

白磁(12)、青磁、土師器(13~16)、陶器等が出土している。量は比較的少ない。12は白磁碗で、高台内には墨書がある。13~14は土師器皿、15~16は土師器坏である。13~14は口径8.6cm・口径7.8cm、15~16は口径11.8cm・口径12.0cmを測る。

SK076 (図11)

調査区中央の北端に位置する。SK075の北隣に位置し一部を切り込んでいる。平面は径1.3~1.5m程の楕円形を呈し、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっている。底面は擂鉢上をなしており、深さは0.9m程。

出土遺物 (図11-17~20)

青磁(20)、土師器、陶器等が出土している。量は比較的少ない。17は土師器皿、18・19は土師器

坏である。17は口径8.2cm、18・19はそれぞれ口径12.0cm、口径11.8cm。20はI類の竜泉窯系青磁碗。
SK060 (図11)

調査区北端に位置する。北側は調査区外にあり、西側は搅乱により失われている。大型の土坑であるが、深さは0.2m程度と浅く、後述する遺物をみても、複数時期に渡る遺物が出土しており、複数遺構もしくは凹部に堆積した遺物包含層の誤認である可能性が高い。

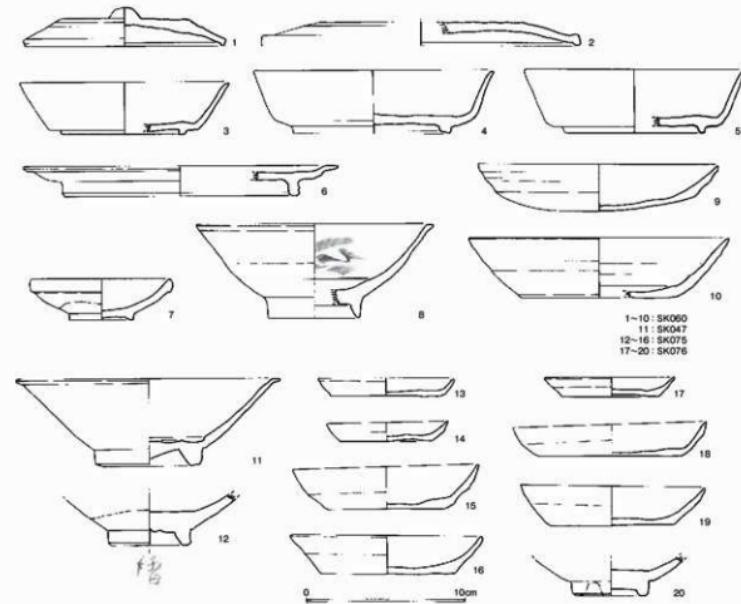
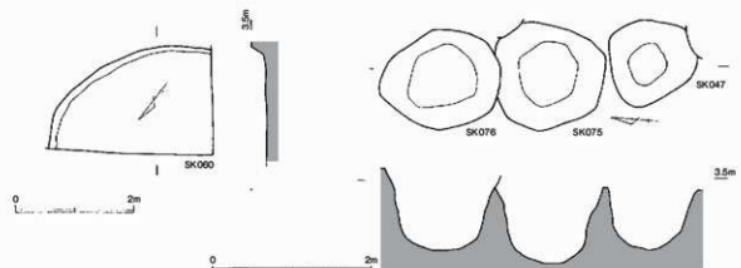


図11 SK047・060・075・076 (1/80, 1/60, 1/3)

出土遺物 (図11-1~10)

1~6は須恵器である。1・2は壺蓋で、1は天井部につまみを付す。1は口径12.4cm、2は口径19.8cmを測る。3~5は壺身で、口径はそれぞれ13.2cm・15.1cm・13.8cm。7・8は白磁で、7は玉縁の皿、8はⅦ類の碗である。8は内面に櫛目文を施す。9・10は土師器で、9は丸底杯、10は壺。口径はそれぞれ15.4cm・16.3cmを測る。

SK084 (図12)

調査区の北端に位置し、第1面で検出した。東側をSD050に切られている。平面は径0.7m程の円形を呈し、内部からは陶器鉢、土師器壺・皿が出土した。遺物は南東側へ向かって下りながら散布しており、この状況をみれば、北西方向からの流れ込みによる混入であることがわかる。

出土遺物 (図12-1~9)

1・3~9は土師器である。1は壺で、体部半ばから口縁へ向かって大きく外反する。口径15.2cmを測る。3~9はいずれも皿である。口径は9cm前後で、底面はわずかに丸みを持つ。2は陶器鉢である。口縁外面はわずかに肥厚し、内側は内面へ張り出している。端面はわずかに凹面をなしている。口径15.3cm、器高7.7cmを測る。

SK102 (図12)

調査区南東側に位置し、第1面において確認している。平面は隅丸三角形とやや不規則な形態を呈する。遺構の規模は、0.8×1.1m程。壁面の立ち上がりはしっかりとしており、底面は平坦である。北側壁面の近くから白磁が1点出土している。

出土遺物 (図12-10)

10は白磁鉢である。Ⅱ類に相当し、口径23.8cmを測る。優品。

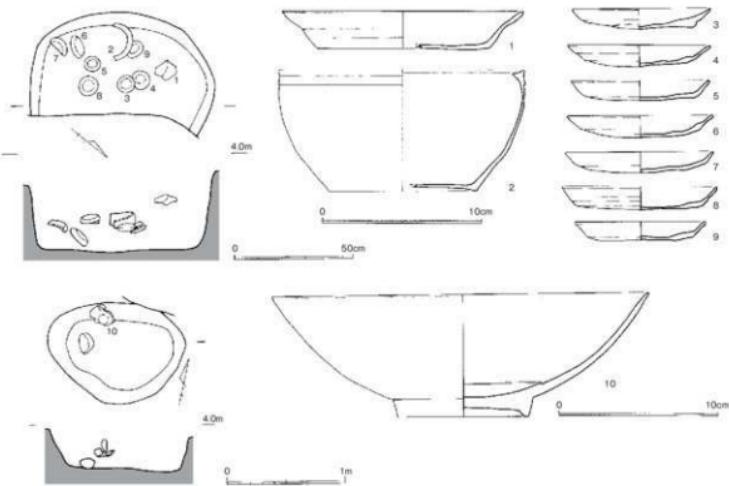


図12 SK084・102 (1/40, 1/20, 1/3)

SK024 (図13)

調査区中央やや南寄りに位置し、SK243の北側を一部切り込んでいる。平面は径1m程の円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がっている。深さは0.6m。

出土遺物 (図13-4)

量は少ないが、白磁(5)、青白磁、陶器、土師器等が出土している。4はIV類の白磁碗で、口径17.6cmを測る。

SK207 (図13)

調査区中央の南寄りに位置する。西側に近接してSK002があり、SK243西側の一部を切り込んでいる。平面は径1m程の円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がっている。深さは1.1mを測る。深さを除けば、近在するSK024に類似する。

出土遺物 (図13-1~3)

白磁(3)、青磁、土師器、陶器(1・2)等が出土している。1は盤でI-1b類に相当する。内面には鉄絵を施す。2は四耳壺で、口縁部は外側へ水平に張り出しており、肩部には沈線を巡らしている。3はII類の白磁碗で、内面には白胎線を有する。

SK243 (図13)

調査区の南側に位置する。SK024とSK207の間に存在し、南北側の一部はこれら遺構に切り込まれている。平面は1.7×1.5mの楕円形を呈し、壁面の傾斜はやや緩やかで、底面は狭い。東側に近接してSK002が存在する。深さは1mを測る。

出土遺物 (図13-7)

遺物量は少ないが、白磁、青磁、土師器、瓦器(7)等が出土している。7は瓦器碗で、口径17.2cmを測る。

SK270 (図13)

調査区の南側に位置し、東側に近接してSK002が存在する。平面は径1.5m程の円形を呈し、壁面は垂直である。深さは1.3m程。平面規模、深さ等は異なるが、SK024・207に類似する。

出土遺物 (図13-5)

遺物量は少ないが、白磁(5)、青磁、土師器、陶器等が出土している。5はVII類の白磁碗。口径16.0cmを測る。

SK292 (図13)

調査区中央南西寄りに位置し、北側の上面は搅乱により削られている。平面は径2m程の円形を呈し、壁面は垂直に近い立ち上がりを見せている。底面はほぼ平坦。土層をみれば、再掘削の痕跡を見る事ができるが、平面上ではそれを確認する事ができない。深さは1.2m程を測る。

出土遺物 (図13-6・8)

遺物量は少ないが、白磁、青磁(6)、土師器、瓦器(8)等が出土している。6は同安窯系青磁碗。8は瓦器碗で、口径15.4cmを測る。

SK293 (図13)

調査区中央南西寄りに位置し、第1面より確認している。SK292の南西隣に位置し、同じく北側の上面が搅乱により削られている。平面は18×1.3mの楕円形を呈し、径2m程の円形を呈する。土坑

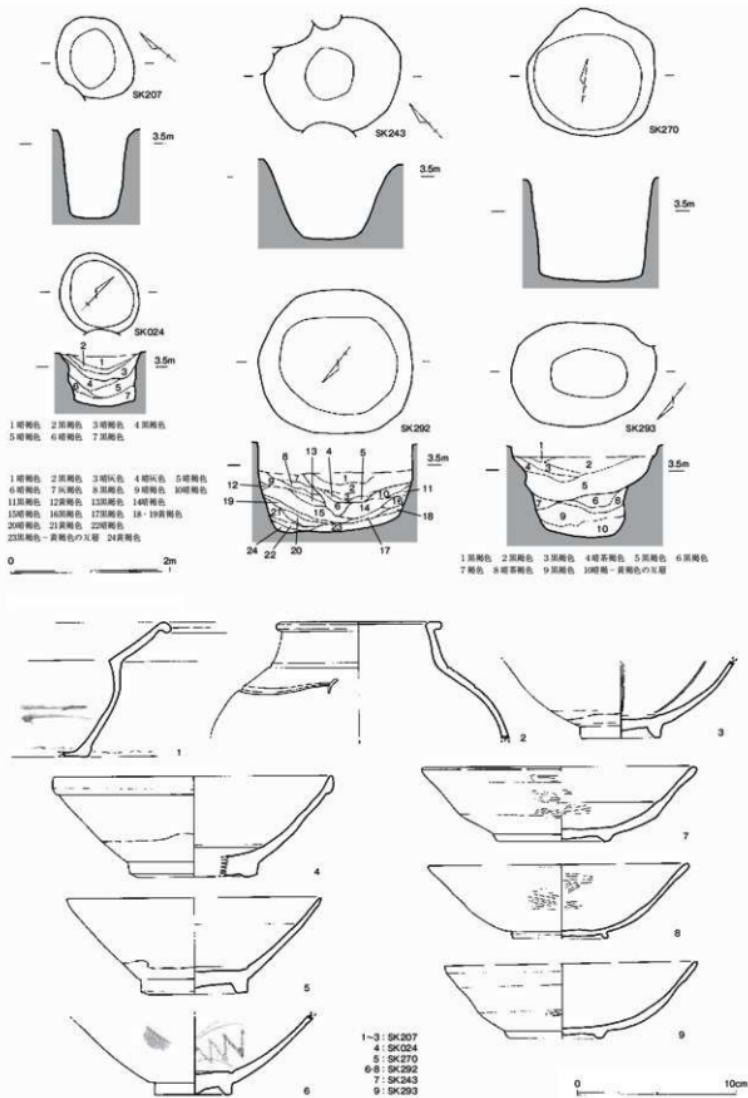


図13 SK024・207・243・270・292・293 (1/60, 1/3)

南西側の壁面が段をなしており、土層を観察すれば、それが再掘削によるものであることがわかる。初回掘削時の壁面は急角度で立ち上がっており、底面はほぼ平坦。深さは1.3m程。

出土遺物（図13-9）

白磁、瓦器（9）等が出土している。9は瓦器碗で口径15.8cm。

②井戸（SE）

井戸は5基（SE001・070・174・501・502）を確認した。SE001・070・174は桶組、SE501・502は瓦組の井戸である。SK064・200・251・445も井戸である可能性が高い。

SE001（図15）

調査区中央の南東側に位置し、平面は径3m程の不正円形を呈している。底面の標高は0.6mで、井戸側の径は80cm程である。

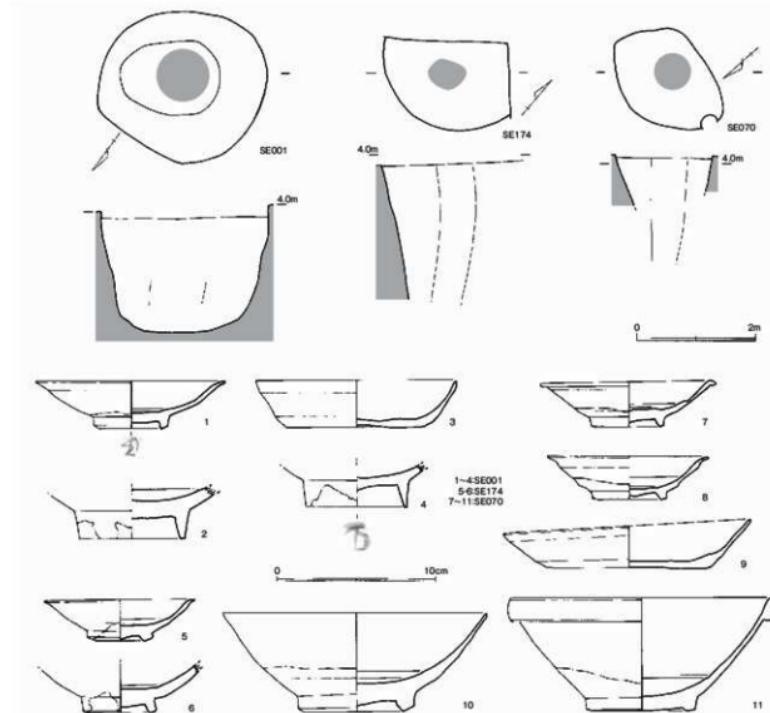


図14 SE001・070・174 (1/80, 1/3)

出土遺物（図14-1～4）

白磁（1・2・4）、土師器（3）、陶器など、比較的多くの遺物が出土している。3は土師器壺で、口径12.6cmを測る。1はⅢ類の白磁皿で、高台内には墨書が存在する。2・4は白磁碗で、4の高台内には墨書がある。いずれもV類。

SE070（図15）

調査区北東側に位置し、平面は 1.1×0.7 m程の楕円形を呈する。SK005や064と接しており、本来は切り合い関係にあったのだろう。井戸側は径60cm程。

出土遺物（図14-7～11）

白磁（7・8・10・11）や土師器（9）、陶器等が出土している。9は土師器壺で、口径10.6cmを測る。7・8は白磁皿で、いずれもⅢ類。10・11は白磁碗で、10はⅦ類、11はⅣ類。

SE174（図15）

調査区中央北側に位置する。遺構北側は調査区外にあり、東側の一部を搅乱やSD050に切られている。平面は径2.5m程の円形を呈するものだろう。井戸側は径60cm程。

出土遺物（図14-7～11）

白磁（5）や青磁（6）、土師器、陶器等が出土している。5は白磁皿で、Ⅲ類に相当する。6は龍泉窯系青磁碗で、I類。

（2）第2面の遺構・遺物

①土坑（SK）・溝（SD）

SK220（図15）

調査区の東側に位置する。土師器壺の埋納遺構であり、平面は径1.5m程の円形を呈する。壺は直立した状態で確認された。掘削により口縁部が欠けているが、本来は完形。

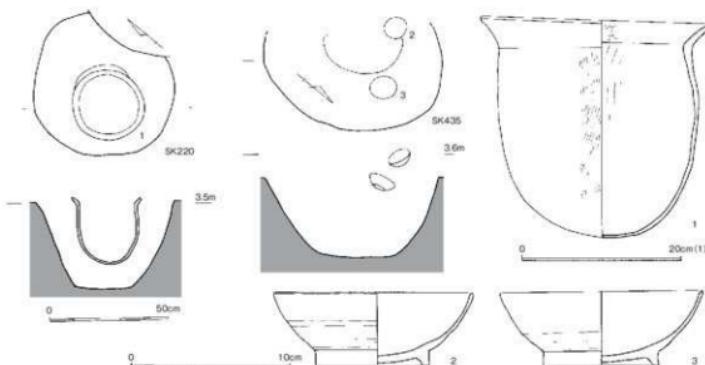


図15 SK220・435 (1/20, 1/6, 1/3)

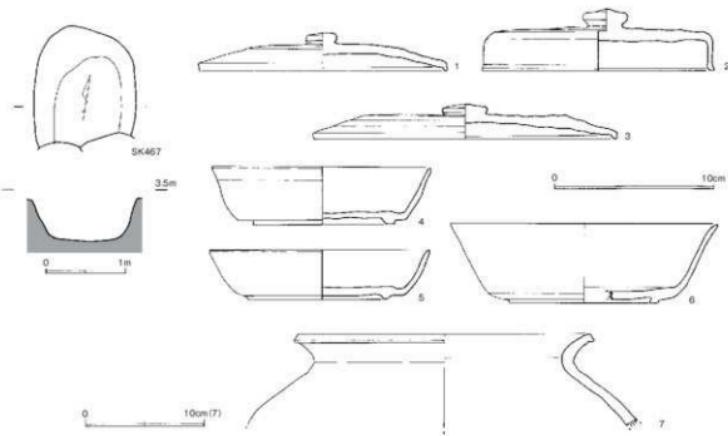


図16 SK467 (1/60, 1/4, 1/3)

出土遺物 (図15-1)

1は土師器甕であり、口径29.2cm、器高27.5cmを測る。丸底で、胴部はやや直立気味であり、口縁部は緩やかに外反する。ほぼ完形に復元できる。

SK435 (図14)

調査区の西側端部に位置する。長径75cm程の平面長方形を呈し、底面は狭く、断面はやや擂鉢状をなしている。この土坑北側の上部から黒色土器2点が出土した。出土状況をみれば、これら遺物は土坑廃絶後の流れ込みによるものである可能性が高い。

出土遺物 (図15-2・3)

2・3とも黒色土器である。いずれも完形で、造作も類似する。内面は黒色を呈し、丁寧なハラ磨きを施している。2は口径12.6cm、3は口径12.8cmを測る。

SK467 (図16)

調査区の中央やや南寄りに位置する。平面楕円形を呈し、南側を他遺構に切られている。SK002の直下に存在する。底面は平坦。この土坑埋土は炭化物を多く含んだ黒褐色砂質土であり、埋土中には大壺破片など多量の須恵器が含まれているなど、特異な状況を示す。

出土遺物 (図16-1~7)

須恵器が大量に出土している。1・3は壺蓋であり、口径はそれぞれ15.6cm・19.2cmを測る。2は壺等の蓋であり、口径は14.6cm。4~6は須恵器壺身で、いずれも底部に高台を付している。口径はそれぞれ13.8cm・13.8cm・16.8cm。7は須恵器甕で、口径24.6cm。図示していないが、この他にも少なくとも2個体の大甕が出土している。胴部片も出土しているが、口縁部とは接合しない。

(3) 第3面の遺構・遺物

図5下に示した遺構配置図の内、第3面は暗黄・黄褐色砂質土上で検出した遺構であり、古墳時代前期に位置づけられるものである。数は少なく、ここでは堅穴住居(SC)を取り上げて報告する。

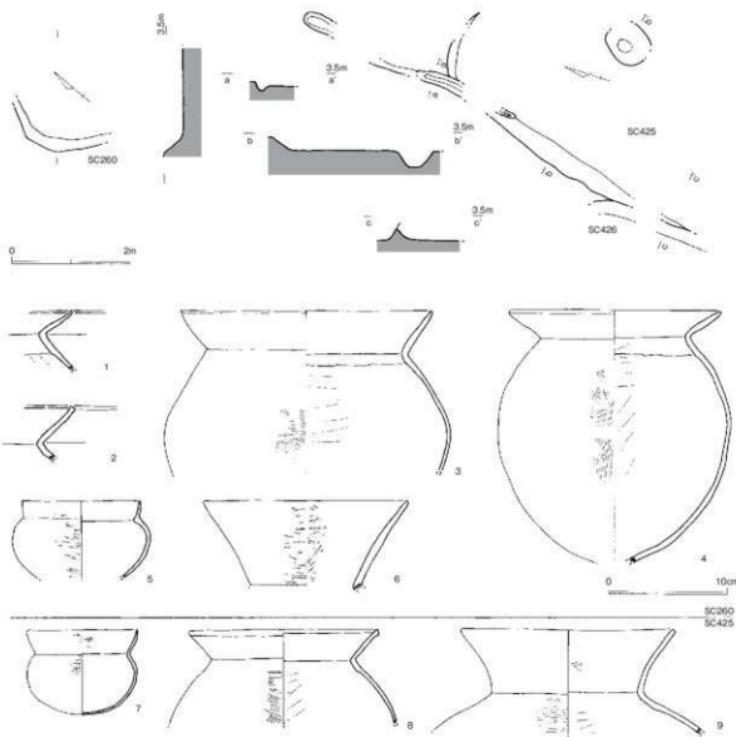


図17 SC260・425・426 (1/80, 1/4)

①堅穴住居 (SC)

SC260 (図17)

調査区東端に位置する。やや隅丸の平面「L」字形を呈する落ち込みを確認したが、周辺に多くの土師器が出土していることから、平面方形の堅穴住居の隅部であると判断した。遺構の深さは0.3m程度で、住居に伴う柱穴等は不明。

SC425・426 (図17)

調査区南側には、古墳時代前期の土師器を含む、暗褐～暗黄褐色砂質土を埋土とする落ち部（遺構）が広がっており、掘り下げを進めていく内に、切り合ひが確認できた（遺構番号425・426）。425をさらに掘り進めると、落ち部の北側でわずかに遺構の立ち上がりが確認できた。これにより平面方形を想定できることや、対応する柱穴（SP424）を確認したことから、調査では425を堅穴住居と判断した（SC425）。ごく一部を確認したことにして、SC425とわずかに切り合う426も、堅穴住居の可能性がある（SC426）。また、SC425の壁際を延長して北側へ延びる小溝も確認しており、これを壁溝等の住居の痕跡と捉えるならば、SC425と切り合う堅穴住居がもう一棟、存在していたといえるのではないか。

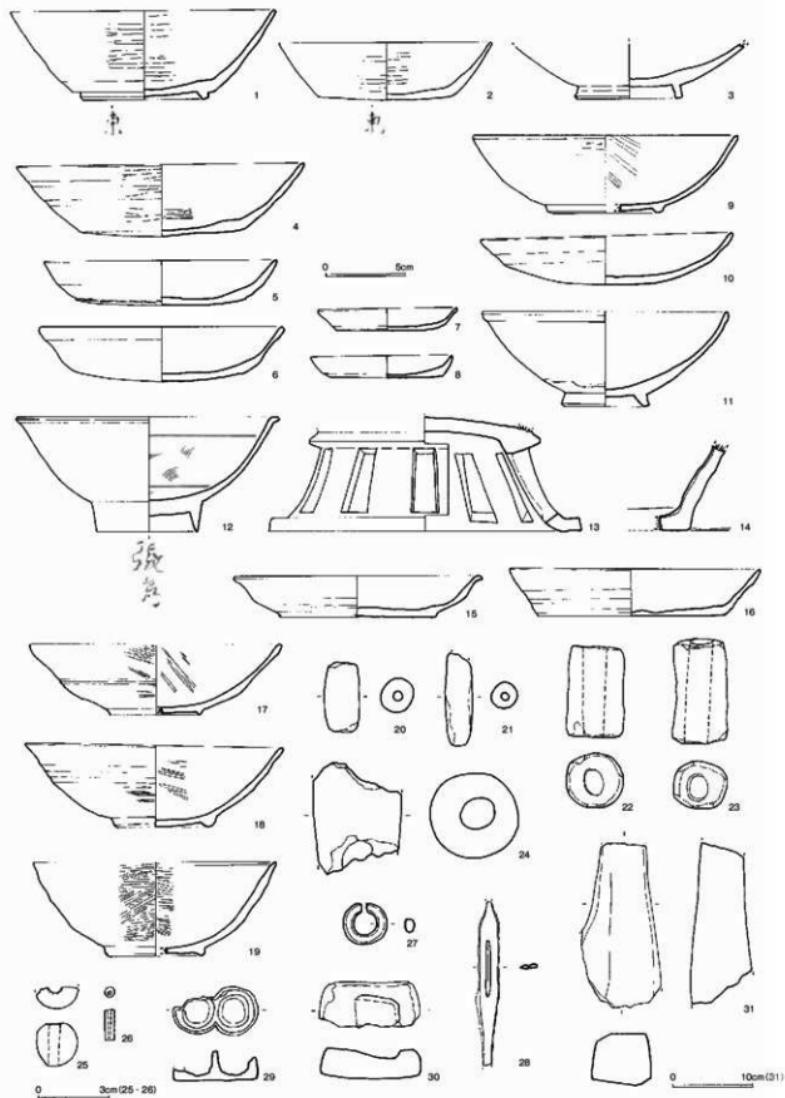


図18 その他の遺物 (1/6, 1/3, 1/2)

出土遺物（図17）

1～6はSC260出土。1～4は甕、5は小型丸底壺、6は壺の口縁部片。7～9はSC425出土。7は小型丸底壺。8は土師器甕で、外器面はタタキ調整。9は壺。

（4）その他の遺物

ここでは、これまで取り上げることのできなかつた遺物について述べる（図18）。1～4は第2面遺構検出中に確認した不整形の凹部（SK083）より出土。いずれも土師質で、表面に丁寧なヘラ磨きを施す。1・3は高台付きの甕、2・4は壺で、1・2は底部端寄りに小さく「東」の墨書がある。5～12はSK291出土。5～7は土師器壺、7・8は皿。5は底部糸切りである。9・10は瓦器、12は皿類の白磁碗。12はSK280出土の白磁碗。V～4b類に相当し、内面に櫛目文を施す。高台内には「張○」の墨書。13はSK249出土の須恵器の円面鏡。14はガラス培塿の底部片でSK174出土。胎土は荒く粗雑な作りで、内面にはガラスが付着する。ガラス培塿片はSK207・290でも出土している。15・16はSK443出土の土師器皿・壺。17～19は瓦器碗で、17はSK099、18はSK160、19は搅乱中出土。19は口縁内側に沈線を巡らす。20～23はいずれも土錘。20はSK115、21はSK174、22・23はSK428の出土。当調査における出土は少なく、形態的にはこの3種に限られる。24はふいごの羽口で、SK270出土。25～28は装身具。25はガラス玉。色調はスカイブルーを呈し、培塿と共にSK174出土。26は碧玉製の管玉で、第3面遺構検出中に出土。帰属する遺構の有無は不明。27は金銅製の耳環で、第2面遺構検出中に出土。帰属する遺構の有無は不明。28は銅製の笄で、SK002出土。29・30は滑石製品。29は双胴器で、SK151出土。舞錐・引弓錐等の回転軸の受け具（加藤編2009：45頁）か。30は硯のミニチュア品。SK005上面にて出土。31は砥石。SK292出土であるが、混入品だろう。

IV まとめ

今次調査は、①古代末～中世前半、②古代（主に奈良時代）、③古墳時代前期を中心とする遺構で構成されており、中でも、白磁・同安窯系青磁・瓦器碗等が出土する12世紀代から、一部に竜泉窯青磁（Ⅱ類）を伴う13世紀前半までの遺構を中心とし、中世後半の遺構はほとんど確認していない。

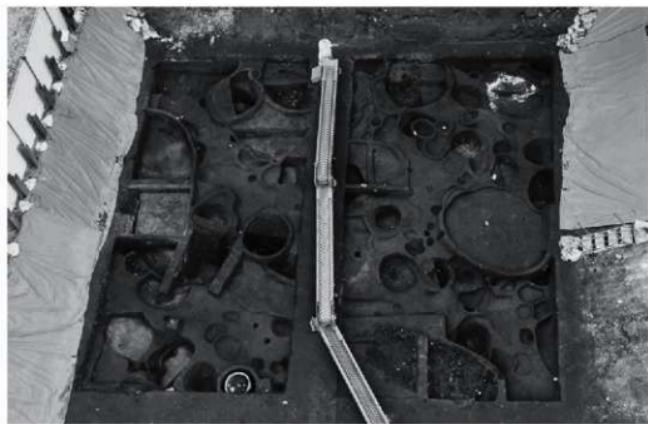
SK002と005は土師器の廃棄土坑で、両者とも13世紀前半に位置づけることができる。出土した土師器壺・皿が類似するなど、大きな時期差をみることはできないが、土坑の形状に加え、前者は碎片を多量に含み、後者は形をとどめた大片が主体となるなど、両者には大きな違いがある。一括廃棄が宴席の痕跡であるとするならば、その一様ではない廃棄のあり方にも注意を払うべきだろう。

当調査地点周辺が官衙域に想定されていることは既に触れた。今回の調査で確認した確実な古代の遺構は少数で特筆すべきものは無いが、の中でも円面鏡の出土は注目される。また、多量の須恵器が埋蔵されたSK467や金銅製耳環の存在も注意を払う必要があるといえよう。

古墳時代前期は、堅穴住居の可能性のある遺構をいくつか確認したのみであるが、まとまった古式土師器の出土や周辺の調査状況をみると限り、当調査地点が集落等の広がりのうちに含まれることは確實である。また管玉の採取は、周辺に墓等が存在する可能性も想起させる。

第172次調査等で確認された、ガラス製作関連遺物は今次調査においても出土しており、少量ではあるが、調査区西側に散在している。この周辺で、ある程度の規模を持った工房の操業が行なわれたことは確実だろう。

図 版





①II区
第1面全景（南東から）



②II区
第2面全景（南東から）



③II区
第3面全景（南東から）



①SK002（南から）



②SK002・467土層（北西から）



③SK005遺物出土状況（南東から）



④SK005土層（南から）



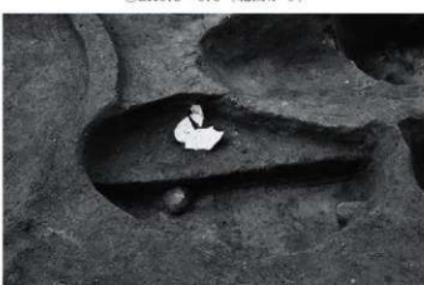
⑤SD050（東から）



⑥SK075・076（北西から）



⑦SK084遺物出土状況（南東から）



⑧SK102遺物出土状況（南東から）



①SK024土層（南東から）



②SK053土層（東から）



③SK056土層（南西から）



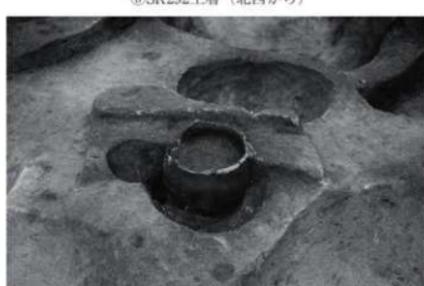
④SE070（南東から）



⑤SK292土層（北西から）



⑥SK293土層（北西から）



⑦SK220土器埋設状況（南東から）



⑧耳環出土状況（南西から）



出土遺物

報告書抄録

博多173

—博多遺跡群 第222次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1416集

2021(令和3)年3月25日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

